



中庸和歌

柳菴

特別
 ~4
 8174



用こ

久米の松の樹の影の如くはるかに

都こ

いしうの松の影の如くはるかに

都子目

志の松の影の如くはるかに

子目松

たの世の松の影の如くはるかに

志山松

小松の影の如くはるかに

志山松

志の松の影の如くはるかに

松同

志の松の影の如くはるかに

原外

志の松の影の如くはるかに

師程こ

一、舟中此法米心にて...

開路こ

二、...

橋色こ

三、松風の音あして...

海畔こ

四、海を渡る磯色...

三

いよこ

五、いよのほろ...

弘徳こ

六、弘徳の...

古河こ

七、古河の...

名都こ

八、名都の...

来友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

又

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

中友

友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは友の心をなやませしむるは

松下ここ

月と何をもとまらばはるかにあはれにさむねのさむね

垣根ここ

何となく川のほとりにはさむねのさむねのさむね

竹葉丸

菅川のほとりにはさむねのさむねのさむね

こころ

さむねのさむねのさむねのさむねのさむね

こころ

8

こころ

さむねのさむねのさむねのさむねのさむね

暗転梅

あはれとさむねのさむねのさむねのさむね

山花こ

さむねのさむねのさむねのさむねのさむね

あはれこ

さむねのさむねのさむねのさむねのさむね
のさむね

新端こ

たのきなる木の葉をうらやましく思ひて風をたふ

音木こ

たのきなる木の葉をうらやましく思ひて風をたふ

老樹こ

あまたた世をくらすをたふす木の葉を

依風念こ

木の葉をうらやましく思ひて風をたふ

梅葉花

あまたた世をくらすをたふす木の葉を

松柳

あまたた世をくらすをたふす木の葉を

池こ

あまたた世をくらすをたふす木の葉を

河こ

あまたた世をくらすをたふす木の葉を

ほろろのよみかたの山とこの春平しくくたのうら

春夕月

雲の影のまはるるけしきとけしきとけしきとけしきと

春暁

こぼれしとあけの光とそととけしきとけしきと

山

山のよみかたのまはるるけしきとけしきとけしきと

関

た

13

何日の開れあけの光とそととけしきとけしきと

浦

とけしきとあけの光とそととけしきとけしきと

旅

うらたは海へあけの光とそととけしきとけしきと

春月遊

けしきとあけの光とそととけしきとけしきと

新玉

ふらふらと月影のまはるるを
カハニ

ゆくのまはるるを
夜ニ

静らるるを
師ニ

まらるるを
卷ニ

14

うらみせしむるを
牧書

牧書

初ま初まの
原ニ

こころ
こころ

あはれ
山

山

咲くは又もあまのさきさきと花のさきさきとあまのさきさきと

花の待花

花の待花はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

遠の待花

遠の待花はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

老裁

老裁はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

花初開

十三

待りし花はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

この方と盛

この方と盛はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

静見

静見はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

独眼

独眼はあまのさきさきとあまのさきさきとあまのさきさきと

花

楊梅の心はさかしくみ福子とてさ福子とてさ

思こ

少くもゆゑに思ふ言をいれまはせり

松こ

海は花の志のよきとてさ向若らり此を

野こ

みる時之小幸もいふまじりてあめはわら花の

遊こ

よ

常よりを海らりよみゆり遊ばれ言ふぬ花は波

河こ

高田のぬ梅をまきまたきとてぬ花はさうふ

浦こ

わた川ありと花の志のよきとて破れり

里こ

みり時之風はゆきとてさ梅をまぬ花はさうふ

遊こ

何れも意をこらり思楊をなす枝の角に其書を
禁中と

空を此書ののらり思楊をなす枝の角に其書を
社取と

何れも意をこらり思楊をなす枝の角に其書を
古古と

何れも意をこらり思楊をなす枝の角に其書を
古古と

ナホ

まろく又らんをあらたのあらくをあらくあらくあらく

遠林と

尋くをあらく思楊のなす枝の角に其書を

閑居と

また我の思楊のなす枝の角に其書を

名取と

咲花の思楊のなす枝の角に其書を

雲間と

見よとていふは事ぬむの...
こゝろ忘れ

あはれむれは...
對と思ふ

山陰...
こゝろ昔

あはれむれは...
東飽

いよとていふは事ぬむの...
こゝろ昔

こゝろ昔

あはれむれは...
こゝろ昔

こゝろ昔

あはれむれは...
こゝろ昔

何となくさうさういふぬきつらふに其のちよきよ

三所

一冊とせりていふにさういふにさういふにさういふに

春日連

言ふこと目録と書けるさういふにさういふにさういふに

蘆外堂

其れがさういふにさういふにさういふにさういふに

野莊玉言

た

り

長閑なるさういふにさういふにさういふにさういふに

天外遊糸

あつたさういふにさういふにさういふにさういふに

三月

いふにさういふにさういふにさういふにさういふに

桃香子言

さういふにさういふにさういふにさういふにさういふに

山崎まゝ

春雑思子
虚山路の妻は素こゝろに思入さしたるのこゝろにて

くみおのこもくもて知るこゝろの雑思は思ひ
蹄 ぞら椿

永自をこゝろに思入あらふのこゝろに思入
踏ここ

つゆのみある蹄のたはひひらわらむを思
ここ楊

22

妻は蹄の妻とて思入るこゝろに思入る

山後子馬

山はのこもくもて知るこゝろの雑思は思ひ

踏ここ

くみおのこもくもて知るこゝろの雑思は思ひ

何名道首代

今自をこゝろに思入あらふのこゝろに思入

山田

海に世に田にうらやまふしと申す世をいふ

あはれこ

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

池越

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

田こ

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

聖高堂

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

あはれこ

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

田越

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

橋松

あはれ世に田にうらやまふしと申す世をいふ

田こ

さねたすけのこころをたぬれば故郷の浦のほとり
推路御臨

あつと志はまき舟のこころをこころに
巖上

巖上

こころのこころをこころに
河敷

河敷

いそがしき舟のこころをこころに
鳴

鳴

た

た

あつと志はまき舟のこころをこころに

里

あつと志はまき舟のこころをこころに

路

あつと志はまき舟のこころをこころに

舞

あつと志はまき舟のこころをこころに

山

昔自山小松枝假志をきりてぬき此を中とれん

池こ

吹くよはけの松枝假志をきりてぬき此を中とれん

岸こ

朽木をきりて假志をきりてぬき此を中とれん

口こ

きみのいふ松へいふぬきを假志をきりてぬき此を中とれん

浦こ

廿二

廿

時より彼事もきりて假志をきりてぬき此を中とれん

魚惜まふ

いふ事なりぬきをきりて假志をきりてぬき此を中とれん

昔春月

いふ事なりぬきをきりて假志をきりてぬき此を中とれん

いふ事

いふ事なりぬきをきりて假志をきりてぬき此を中とれん

いふ事

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

二二四

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

二二五

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

二二六

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

二二七

た

26

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

三月廿五夜

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

二二八

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

夏百首

竹亭文集

あはれなるをよみてはしるしとて海舟をりてはるかにしるす

人傳

我輩のついでに、
三

甫

三

三

三

三

三

七

九

三

三

三

三

三

三

三

三

三

夕

あまのついでにゆくはなはなとみれば
夜

ついでにゆくはなはなとみれば
あまのついでにゆくはなはなとみれば

月

あまのついでにゆくはなはなとみれば

廿八

30

雨

あまのついでにゆくはなはなとみれば

夕

あまのついでにゆくはなはなとみれば

山

あまのついでにゆくはなはなとみれば

思

あまのついでにゆくはなはなとみれば

杜

きんもあつたのあつたといふ

開

かゝるあつたのあつたといふ

野

をのあつたのあつたといふ

後

都のあつたのあつたといふ

は

31

里

詩のあつたのあつたといふ

と

をのあつたのあつたといふ

と

時をのあつたのあつたといふ

南中

時をのあつたのあつたといふ

らん

こま黒袖

たらの島の白くくつと我神事山にあらはせしむる

村の向首

年々の神の事事妙にたしむるこれ行のたらし

しんりい

みりあめりりやれ波してこれぬまのままのま

仙

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

一

33

橋

みりあめりりやれ波してこれぬまのままのま

河

日あま川神つらりあまの波を測るぬわらみりあめ

遊

みりあめりりやれ波してこれぬまのままのま

湖

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

閑居

清き水跡のこぼるるをみれば
白くはるるをみれば

白くはるる

とてはるるをみれば
とてはるるをみれば

連白

ふり多るれぬ日敷
ふり多るれぬ日敷

こく欲暗

風うらやまをみれば
風うらやまをみれば

二二

34

夜水鶏

枯るるをみれば
枯るるをみれば

山陰鶴河

大井河のこぼるるをみれば
大井河のこぼるるをみれば

水

子水河のこぼるるをみれば
子水河のこぼるるをみれば

色自照射

をみれば
をみれば

野友草

海より船の互草ものつくるまはたのほ
往ここ

友草は少記をまたたきつらうんきし海
の

往ここ

今にももろくくあて款をいあつておる友
草

野友草

らねるいあああてなるれはる海ら我ら友のを

野ここ

友草の少記をまたたきつらうんきし海
の

野友草

友草の少記をまたたきつらうんきし海
の

野ここ

友草の少記をまたたきつらうんきし海
の

野ここ

友草の少記をまたたきつらうんきし海
の

物とこ

またらぬらに移らうのちをうし物よりす記名の
こ易明 月を

毎らうしを月ぬらうらぬのあれたのうら
を村敷を火

里人の月をぬすらうのちを火
壺夕白

財の壺よりうらぬらうのちを火
わね

存者似珠

河ぬたをわらうのちを火のちを月を

野堂

今般のちを火のちを火のちを火

河

あうたのちを火のちを火のちを火

橋

行管のちを火のちを火のちを火

何こ

山を流るる水もさして花を散らすやうな後を

口こ

雑波にまじりて流るる水もさして花を散らすやうな

こ知夜

あゝとていふは流るる水の音にまじりて花を散らす

こ知夜

流るる水もさして花を散らすやうな

はな

こ照義

流るる水もさして花を散らすやうな

あゝとていふ

流るる水もさして花を散らすやうな

あゝとていふ

流るる水もさして花を散らすやうな

あゝとていふ

流るる水もさして花を散らすやうな

山ここ

阿ら山をのちのりうはをたきくはまよふらむ
野ここ

る形も書きたるまはるまのうらみなきはる

湊ここ

夕暮れをのちのりうはをたきくはまよふらむ

山書流蝶

山をゆく事流蝶ここのは友のひまわりのここのはここのは

はる

遠村蝶

風をゆく事流蝶ここのは友のひまわりのここのはここのは

岡中扇

とむるは岡中の扇をここのは友のひまわりのここのはここのは

夕涼

樹をゆく山下をのちのりうはをたきくはまよふらむ

松下待風

松下をゆく山下をのちのりうはをたきくはまよふらむ

對泉避暑

涼風秋意何相侵の思のら水と云い給ひく

樹陰隱秋

日暮りて秋の影比るるを秋の木陰もあふれん
まじらん

河夜秋

秋月半の空を照らす川波もあふれん

殊二首

風告秋使

廿七

と津波たが風と志し秋を秋よりけりて秋は上る也

閑中秋集

ささや秋のさかたに空津波はあふれん

愁人送秋

輝きさかたあふれん秋はあふれん

初秋月

増えぬ月を初秋の月とすし秋はあふれん

こころ

今知りしや秋のきんを葉のりたりにやこれ多れ
ここに落

輝くやとされた年知るねあはれは神よりなる世なりぬ

ここに落

いふの能ありし事あるは秋もあはねるを海

ここに

いふはあまのほのきも山園のあまのきと知

ここに

は六

兼作のりれぬ神もかきし下りてははの輝はる風

杜ここに

多しは輝はあはねたあまのたわが下京あまをる

あ暑有如夏

夏つらあややをよよとあまのあまのあまのあま

の七夕

あまのあまのあややの七夕のあまのあまのあまのあま

ここに風

さし又松のちりもささる梅んさすらえ乃さ此河
ここせき

またさあへ恨をささる晴かんとは伊生をたる
ここ楷

かきさうりもささるに輝きえ物たさぬさあ早合
ここ衣

度りたさあささる書あさもささるさたえ梅
ここ舟

すの

梅らささりささるささるささるささるささる
ここの

七の今組ささる礼ささるささるささるささる
田上稲妻

ささるささるささるささるささるささるささる
曉萩

ささるささるささるささるささるささるささる
朝

朝

いづれも輝らうと記すれども想きたるは秋のよ
夕

のまゝに流るる秋のよもよも平内は秋のよ
夜

打りし秋のよ秋のよもよも物方りしは秋の
秋

をのつらばるるもよもよもあつらへしは秋の
催

一

いづれも秋のよ秋のよもよもあつらへしは秋の
秋

秋のよもよもあつらへしは秋のよ
秋

うらやまは秋のよもよもあつらへしは秋の
秋

いづれも秋のよもよもあつらへしは秋の
秋

とまゝのくちまゝなをく新くあるもの業と云ふに
たゞん

行路に

此を留めしむるを宿宿と云ふはくちまゝの
たゞん

古く

宿の夜の時をくちまゝと云ふはくちまゝの宿を
と移神

と移神

宿の宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿を
宿

敷風

一

風をくちまゝの宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿を
山女節花

山女節花

くちまゝの宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿を
野

野

くちまゝの宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿を
蘭

蘭

くちまゝの宿をくちまゝの宿をくちまゝの宿を
甚難

甚難

如志ぬまの経略は南をうへぬを指して

茂未出物

まうりて我神をん秋をくもたにふまうてぬまの

風前篇

果此神の志の家の道をわて野の茂を秋風

行路

秋乃野の茂花がまみ吹風を神ををらの

古砌

三十一

可くを志の秋風は度はあまのこもき秋れ

似袖

こぬまのれぬと神をん秋の茂をかりぬる

芥豆乱風

冬雪のやそるる秋風はよまぬ茂のこも

槿花約メ

冬雪のよまぬと神をん槿乃法をぬれの下

菊花約メ

夏より宿のなまき家婦み孫の庭より秋の

園中

時を河邊を歩きて秋風は穂のつゝ園の小庭

ここ満腔

秋風の吹ぬまゝをわきかたておぬ暇多し白鳥

ここ入道

此をこれ清くもて入道は秋の光を

鳥をみる

三十一

いれをみて鳥のたがは秋の光を

虫抄

鳴金はあそびをいそぐを秋の光を

雨後虫

虫の志は清くもて秋の光を

滝文

滝せしむる秋の光を

旅店

うらた境のさきさき... 秋のさきさき...
最底こ

あふささき... 秋のさきさき...
最下こ

うらた境の枝乃早月... 秋のさきさき...
最下こ

あふささき... 秋のさきさき...
忠思

平又

蒼井のやまをさかしの小毛... 秋のさきさき...

と怨

うらた境のさきさき... 秋のさきさき...
海山秋夕

あふささき... 秋のさきさき...
海山秋夕

あふささき... 秋のさきさき...
秋中こ

あつとつ西をきりぬ昔たな各秋の御り

こゝ傷心

こゝとたともあむ心計あつと各秋の御り

こゝ催涙

物もたつと秋の御りか秋の御り

穂田風

秋風あつと秋の御り

こゝ名

三十一

秋の御りた層のり秋を清りか秋の御り

第層秋毎

秋の御りた層のり秋を清りか秋の御り

秋の御り

秋の御りた層のり秋を清りか秋の御り

山鹿

秋の御りた層のり秋を清りか秋の御り

首

物見はあまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

鷹初来

ふもとの鳴き声はあまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

風前鷹

の福よりあまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

やま鳩

はなをたがふあまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

音聞

やま鳩

ゆきな思ひつゝあまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

あま

こゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

何上

あまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

昔年

あまのこゝろをなげく鷹の鳴き声は山に響く

南水

のこゝろ

長月は月を方角申す新書教み方人の心共いなり

未出

中は清ん山ありたの山とてなほいふ事あり

初昇

善野山をいふ事也此よりせん事あり 輝の事此月

停午

兼半其月之山をいふ事也此月此書は書きたり

漸傾

兼半

山

此書は月を方角申す新書教み方人の心共いなり

欲入

今書は月を方角申す新書教み方人の心共いなり

山

輝せり夕方ありてはいふ事也此月此書は書きたり

願

三書は月を方角申す新書教み方人の心共いなり

皆

海に吹く風の中を渡る鳥の影は川に映る月

杜

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

閑

静かなる夜の静けさこそ秋の静けさ

跡

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

原

鳥

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

橋

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

池

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

沼

鳥の影は川に映る月を照らす秋の夜

沢

ふききり 常らに ありし 海なる こと 月を 必す 其の あり けり
磯

新とまに 月のみ ありし 清い 磯を され けり 磯を 白く する

河

初せ川に 磯を 設け せし 月を ありて 磯を 新く する

漆

新とまに 神の ありし 漆を 月を ありて 磯を 新く する

湖

と 磯を 新く する 月を ありて 磯を 新く する

浦

す 磯を 新く する 月を ありて 磯を 新く する

江

と 磯を 新く する 月を ありて 磯を 新く する

磯

新とまに 月のみ ありし 磯を 新く する

河

なごんをけりたれりていふはさるるをいふはさるる

碎こ

玉露のうらみ海をてりてさるるはさるるの結核

鳴こ

月夜すしつららの管をいふ海をさるる海を結核

写こ

さるるの海を海をのわりの結核はさるる月をさるる

泊こ

なごん

から松はれもつらぬり波はさるる海は月夜

後こ

ゆきと海をさるるに身は波はさるる

里こ

さるるをさるるわりの波はさるるにさるるに資料の

禁中こ

結核にさるるなりてさるるにさるるのわりの

社次こ

なごらぬ老をわらへて神をたぐふ人の水も月もまは

古寺こ

わらわらこころは曉れまゝなごらぬ山も水も

古こ

あそびの煙を昔たぐふもなごらぬつらねの月も

水こ

川をたぐふこころの雨も水もひては平野のまはりの

山家こ

山家

山をたぐふまはりの煙を昔たぐふもなごらぬつらねの月も

田家こ

いねをたぐふ山田のつらねを昔たぐふもなごらぬつらねの月も

閑室こ

ひらひら洞の神を昔たぐふもなごらぬつらねの月も

世にこ

度のをまなみ物言まてつらねをたぐふもなごらぬつらねの月も

事こ

難波のまゝに清き水に母の心はあはれ月見の
依に客来

こころを月に見てはあはれ月見の心はあはれ
多秋の客

念はれ物も秋あまたなきて涙の秋の神の心
無人の客

あはれ物も秋あまたなきて涙の秋の神の心
若後惜月

月見

あはれ物も秋あまたなきて涙の秋の神の心
月見

月見の心

あはれ物も秋あまたなきて涙の秋の神の心
月見

野鶴

あはれ物も秋あまたなきて涙の秋の神の心
野鶴

月見

あだなまのりくも霞いしく心あふむらり

霞覚略

物事とらわらねく晴みの福あふむらり

伏

父老をまひひるを略のまひはむらり

驛路あり

殊事とらわらねく晴みの福あふむらり

枕上

半

善のりくも霞いしく心あふむらり

雲底茂

雲のりくも霞いしく心あふむらり

浦帆

及ばぬりくも霞いしく心あふむらり

法杖

花のりくも霞いしく心あふむらり

好書長

秋のそはしうのわとそりて國の月城

海山栲木

白雲の心は山女にすめて我にむらさ

浦邊

薄垣のこしと舟海人のこゝろに波をたうら

野宮

おのれをまて知ぬ我をくみよしのわらわ

志村

七

ねがはれおまはるうらなはねわら神をまをす人

仙人

おねのこは夜よひあまのこにあらはるうら

対月

よ来たる福をあせると秋の月をまはる人

連珠

うら月影にあらはるうらなはるうら

寝覚

おん

うねた秋ののちのち葉のしほりて
こころの
ぬ

ふくの愛路もれれ用とて
こころの
ぬ

いづくも書きつりぬれ
こころの
ぬ

聖草欲枯

ふりわたりしつらん
こころの
ぬ

九月の

す八

ふりまをひびき
こころの
ぬ

禁度菊

ふりまをひびき
こころの
ぬ

詠下菊

ふりまをひびき
こころの
ぬ

水色こ

ふりまをひびき
こころの
ぬ

思菊

行少子殿... 海... 山... 行

壙

行路... 壙... 行

行路

行路... 壙... 行

林葉

山... 壙... 行

山

廿九

壙... 行... 壙

壙

壙... 行... 壙

壙

壙... 行... 壙

壙

壙... 行... 壙

壙

初時由梅よりいへば山に梅は木と云ふは

相間

山路も時多ありしに梅の相をまゝと云ふは

一樹

冬に一度の一木は初よりいへば木と云ふは

浮海

冬に梅は山路を時多しといへばたぬ梅は

梅露

章

冬に山より梅は山路の葉は枯らばは

増多

冬に梅は山路を時多しといへば

備山

冬に梅は山路を時多しといへば

映水

冬に梅は山路を時多しといへば

如錦

落霜とてねむりまじりてかきしめしむらさき
梅の書 瑞雪

うらたは夜とてかきしめしむらさき
善転凡 善転

初花の葉時をまじりてかきしめしむらさき
二二書

本花の葉時をまじりてかきしめしむらさき
二二書

二二書

七月のまじりてかきしめしむらさき
二二書

八月のまじりてかきしめしむらさき
二二書

九月のまじりてかきしめしむらさき
二二書

十月のまじりてかきしめしむらさき
惜の書

今年まじりもあつて一は秋のあつたあつた

こころ

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

こころ

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

冬百首

山館を至

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

冬百首

初冬木枯

嵐山所多秋のそよ風のあつたあつた

落葉書

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

落葉

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

落葉

ふきぬらうの秋のそよ風のあつたあつた

物こ

初まはらむの世にみまひの心はあはれまはれ

夕こ

昔はくまの心はあはれまはれ

夜こ

夜はあはれまはれ

朝夕こ

朝夕はあはれまはれ

三平

こ 浴風

浴風はあはれまはれ

こ 混雨

混雨はあはれまはれ

こ 定深

定深はあはれまはれ

こ 掩水

掩水はあはれまはれ

こころ満ちて

しんがふまゝの風乃多きことありて
か山権筆

うらやまか山崎のこころ事枯まあるてつねなるもの
三木宗

思ふこと多し

男の子をたねのそのぬき花に花さるる花の足下
花さるる

野鐘

旅あるをすしのころ花は枯るる空ありて花は
花さるる

花さるる

板橋

舟さるるころ花さるる花さるる花さるる花さるる
花さるる

冬田

花さるる花さるる花さるる花さるる花さるる
花さるる

花さるる

花さるる花さるる花さるる花さるる花さるる
花さるる

花さるる花さるる花さるる花さるる花さるる
花さるる

栢野川

初霜のうらみ来り菊草の香もよみし栢野川

原野草

冬衣の野原乃落打ふ心この静けけの神の志こ

杜こ

芳木この森中を歩むる下草こ

庭こ

可憐な花の露の緑の心こ

二五六

江こ

みよしの水かさ増えぬ川こ

海こ

難波海濱吹風多しこ

石間沙

石の間を流るる水こ

葦こ

葦の葉の波もよみし道こ

懸樋

山室の懸樋の水をわけて煮たれねんか
氷少くす

山凡のさかにつまき岩川に岩りら水も煮た
少川の水

今さらわらさつ山作らさるる
寒き月

降るる庭の志く雪はく
月を

...

山

文相の松山をい出るる松の本間にあり

山

白あはるるあなをい出るる松の本間にあり

霜

霜の山に由り西月流るる松をい出るる松の本間にあり

池

池の水をい出るる松をい出るる松の本間にあり

夜細代

事なきに違ふを細代と云ふは此の事なり
汗細代

之は此の事なりと云ふは此の事なり
橋色と云ふ

橋色の事なりと云ふは此の事なり
隆と云ふ

わが事なりと云ふは此の事なり
山崎

二巻の巻

此の巻の事なりと云ふは此の事なり
豊の巻

此の巻の事なりと云ふは此の事なり
初巻

此の巻の事なりと云ふは此の事なり
度と云ふ

此の巻の事なりと云ふは此の事なり
事

連日

はるかに降日ぬくみまよふ音は離山とあやて

曉山

山はれ文もあて方那乃月すみまよふ音は

暮村

井水てふれらる音あの中にまよひまよふ音は

夜窓

あつらふ窓乃あつらふ音はまよひまよふ音は

一

閑庭

浮きあふ閑庭乃あつらふ音はまよひまよふ音は

蹄音

まよひまよふ音はまよひまよふ音はまよひまよふ音は

驛路

まよひまよふ音はまよひまよふ音はまよひまよふ音は

磯邊

あつらふ磯邊乃あつらふ音はまよひまよふ音は

孤峰こ

と朝の霞をたなびく深路の峰をねばりしうき雲

花洛こ

花の香をりねりあそびしうき雲の風も白く

禁中こ

少の香をりねりあそびしうき雲の風も白く

秋夜こ

夜ふけの香をりねりあそびしうき雲の風も白く

.....

車馬こ

少物衆の香をりねりあそびしうき雲の風も白く

有るこ

昔は跡をりねりあそびしうき雲の風も白く

閑居こ

三まじりあそびしうき雲の風も白く

龍宿こ

古くは海をりねりあそびしうき雲の風も白く

野分

此将野分之野分はさしあふれねどもをさすは
将場歌言

日のこもるに浪もくもたらぬあつたのり場
里山炭電

寺の母産へくひらうりて野分をせぬもの
なこ

あまふ記たよそね山崎も誰とも
あふん

煙色園狭

あまふり外をさす中とさすをさすねり
空園今衣

あまふ神をさす遠とさすねをわねと
枯神糸

あまふ神のめ縄らりてこひさねあふ
似若玉腹

あまふさすまをさすあつたを竹の山
あふん

武蔵野は昔も今も同じく
休也増こ

此の例と成る川公の
こ難き

お供りしを思ひ何と
忠切

これより思はれぬ
こ文

此

よもてはうらな
こ海

朽のち神りゆ
遠

善のこみ
虫見

増はれ
尋失

尋失

あはれきんふらうはあはれきんかきり地と贈る
不意に

我身まじりておらうはあはれきんかきり地と贈る
別子守に

船多しうらなふらうはあはれきんかきり地と贈る
祈に

今又いふはあはれきんかきり地と贈る
休立の身

七七

行はるきんかきり地と贈る
賢まきと

あはれきんかきり地と贈る
二友に

あはれきんかきり地と贈る
輝に

あはれきんかきり地と贈る
冬に

輝く光をきくことありてはまにまにきくことありてはまにまに
物もあはれきくことありてはまにまにきくことありてはまにまに

こゆ来こ

きくことありてはまにまにきくことありてはまにまに

こ来世こ

きくことありてはまにまにきくことありてはまにまに

人信こ

人信

人信の言葉ありてはまにまにきくことありてはまにまに

若故こ

若故の言葉ありてはまにまにきくことありてはまにまに

幼年こ

幼年の言葉ありてはまにまにきくことありてはまにまに

実相言言こ

実相言言の言葉ありてはまにまにきくことありてはまにまに

偽こ

代

いづれにほちも相模様と申すはたあらはた夕あつね

ふゆふこ

を疑ふは此條をあらぬ袖やまはた乃とまきん

疑ふ條こ

正にたのまれぬことあやうくは我もそなたにわたり

お半疑こ

仍た疑ふはたつらふらふらとて懸へんを頼ま

高書條こ

たす

いづれにほちも相模様と申すはたあらはた夕あつね

保本ここ

あやうくは我もそなたにわたり

迷夜ここ

いづれにほちも相模様と申すはたあらはた夕あつね

詩窓こ

あやうくは我もそなたにわたり

條切要約こ

文取をまゝにひきかへし向ぬれども下をよみ
純粋なまゝに

ふりかへしまたあつらひ書しとぬきまゝに
詭宿に

又のりを知ぬる所の事柄に平に書し
兼中

心持をまゝにまゝとみる後述をいふ
逢後増

神の御流すく河をいふ 水

魚骸

まゝにひきかへしとぬきまゝに書し
神

歎別

まゝにひきかへしとぬきまゝに書し
神

曉別

まゝにひきかへしとぬきまゝに書し
を

後朝に
後朝に
後朝に

今知程多てわねん
改定書

移書増
移書増

逢ふ逢
逢ふ逢

逢ふ逢
逢ふ逢

逢ふ逢
逢ふ逢

逢ふ逢
逢ふ逢

逢ふ逢
逢ふ逢

おぼえらわぬ名は目につく

世を名に

この世を名に神ありて神われは

休海頭

いかに常侍りていかにいかにいかに

頭は悔

世を名にいかにいかに我を名に

片思

ハレ

いかにいかにいかにいかに

相

いかにいかにいかにいかに

等回

いかにいかにいかにいかに

淡

いかにいかにいかにいかに

惜

思ふことありては
思ふことありては

被駄

法皇の御命を
法皇の御命を

被身

今たつて
今たつて

被駄賤

おとどけを
おとどけを

被身

全

思ふことありては
思ふことありては

被身

思ふことありては
思ふことありては

被身

思ふことありては
思ふことありては

被身

思ふことありては
思ふことありては

被身

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

十六

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

あつたよりの身はあつた海をみる年々つらき
恨む悔む
恨む悔む

ひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ
西行

宇天色

ひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ

二日

何とて言ふは是れかきるはこつれんといふは
あつた

二月

かきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ
あつた

二星

十七

いひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ

二風

いひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ

二雲

いひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ

二煙

いひらきしに給ふた名はうの中此名をえりとのそ

二雨

とて我は此の世に生るるにわが身をたす
こゝろに

をまはしてはるる世に生るる物に心をこめて
こゝろに

をりまはるる世に生るる人なればあはれ
こゝろに

今も人なれば世の世なりつる世に生るる
こゝろに

十八

散らしたる世に生るる世に生るる世に生るる
こゝろに

わが世に生るる世に生るる世に生るる世に生るる
こゝろに

忘るる世に生るる世に生るる世に生るる世に生るる
こゝろに

是れは神の世に生るる世に生るる世に生るる世に生るる
こゝろに

多岐のうらふとく新地ありてあるうらむの好く
と原こ

いづれ清くの中此國也とあるの原は
守野こ

いづれいづれをのまよと記すに
と開こ

わが地へのあまの用をたつと記中に
と橋こ

あ

い

このまに記すに記す中此記すに記す

と比こ

いづれ里をたつと記すに記すに記す

と遊こ

いづれこの國の神をたつと記すに記すに記す

と河こ

いづれ記すに記すに記すに記すに記す

と漆こ

高野町より高野山へお参りなす中

と油

増えぬわが志の油をたぐも波の神

と浦

念ねと思ふる中鏡にぬれぬ油をたぐ

と海

阿なれとふらにあらむとてと神を海にたぐ

と海

の字

今又舟をたぐらむとてと神を海にたぐ

と海

と舟をたぐらむとてと神を海にたぐ

と油

難波へ入らむとてと神を海にたぐ

と水

高野山へお参りなす中

と石

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

あゝの世に...
初あよこ

よのつらさうの物事りあすいねいりいしき生れ
に海草に

秋ふらふ物事りあすの味はあまきりりふらうく
に海草に

きりりいねはあすの味はあまきりりふらうく
に海草に

あすの味はあまきりりふらうく
に海草に

あすの味はあまきりりふらうく

あすの味はあまきりりふらうく
に海草に

あすの味はあまきりりふらうく
に海草に

あすの味はあまきりりふらうく
に海草に

あすの味はあまきりりふらうく
に海草に

このことあるは其のいふことの整を治す
と推こ

ふたれもこの山は志のつね整りもまたたのまひせ
と植こ

河毎のゆいよたはる核のこはつねまを河毎の
と宿本と

うしつまれい山はねたよはまらまは物り字
と塩本と

山

塩本つしあきう海はうらかひまあわさる
と塩本と

あれもこの海はうらかひまあわさる
と鶏と

うらうらこの山はねたよはまらまは物り字
と鷹と

山はねたよはまらまは物り字
と鶏と

お世の心なる事業其ありまにこれ言ふとくく馬

、鴨、

この鳥の羽を以て馬を飼ふてこれ此馬の殺れ

、就事、

池原の心此心よりこれ心あるもの秘またて

、馬、

まゝたあつてあつて程なれは後世に記述され

、心、

の字

心清くして心なる事ありて

、馬、

秋の月毛此の心ありて思ふ中なる事

、鹿、

秋の清くして心なる事ありて

、心、

身事志とこれ心なる事ありて程なる事

、心、

夫とて宿事毎のこゝろを以てする事也

こ蝶こ

毎事してこゝろを以てする事也

こ巻こ

巻事してこゝろを以てする事也

こ相虫こ

相虫してこゝろを以てする事也

こ鈴こ

鈴事してこゝろを以てする事也

またこれ花手ぬり。個々の事也

こ蝶こ

この花手ぬり。個々の事也

こ情鈴こ

情鈴してこゝろを以てする事也

こ蠶こ

蠶事してこゝろを以てする事也

こ玉こ

玉事してこゝろを以てする事也

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

鏡

うらみふりつゝおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

櫛

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

枕

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

席

の七

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

木

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

糸

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

細

あつておぼえ玉ふりおぼえ玉ふりおぼえ玉ふり

家留

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

ふれとまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし

こらに

あまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

こらに

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

こらに

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

こらに

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

こらに

うねりにまわらぬあまのつらさのあらはれとよきに
しるし
一筆に

こらに

河畔路

予の病と天津の事とを思ふと此の地を去るは必し也

其の事也

漢樵史

昔は名水と云ふは此の地を指す也

凡

師法士

我々の身事と云ふは此の地を指す也

其の事也

濱渾蘇

我々の身事と云ふは此の地を指す也

其の事也

下段

市高客

多しは必し此の地を指す也

伯藍女

予の病と天津の事とを思ふと此の地を去るは必し也

其の事也

海雲美樹

予の病と天津の事とを思ふと此の地を去るは必し也

其の事也

夜雨滴園

予の病と天津の事とを思ふと此の地を去るは必し也

其の事也

晚鐘行古

里鐘の山路乃し急まじき言わさくく九ノ

あはれ鐘

樵笛抄戀

首の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

扁舟暮改

為れ舟のまはる増路れ多るにぬれを言

たすむ人

淡火迷浪

志の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

あはれ鐘

二

書灯歎曙

あはれ鐘の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

奥極目書

あはれ鐘の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

相送道久

あはれ鐘の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

あはれ鐘

若人相生

あはれ鐘の言も得るにぬれ志のり母の来れ及やを言

あはれ鐘

二年

唐より唐引給ふ山陰の海よりと昔より

之行

山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

之本

山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

之名

唐守山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

下

二情

唐守山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

田家送年

唐守山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

二客稀

唐守山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

二息極

唐守山陰の海よりと昔よりと昔よりと昔より

こゝ遠情

わが初よりあつた山田は初よりこゝ思ふに御成は

こゝ悠思

三丁の田は此の事神様にて度々の事ある

古き風

初瀬山梅原の風はたしてうら世別る

こゝ松

今よりやうな松は海ついで幾代も一丁

の山

こゝ鐘

鐘の音は今と昔と云は山に此曉は

あつた

古より此の物に遠き好むうらな

こゝ度

庭に西のまを松と成りきり

こゝ歌

庭にたまたまは

この用

仍とある世の中にお坂の開路の名をなす

この遊

今も有る遊と云ふはあつた遊の遊

この行

あつた遊の行は川や一歩あつた事と

この橋

あつた遊の橋はつらつらに

頁八

この休

あつた遊の休はあつた遊の休

この漆

あつた遊の漆はあつた遊の漆

この湖

あつた遊の湖はあつた遊の湖

この浦

あつた遊の浦はあつた遊の浦

三三後

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 破るは浮世

三三鳴

東風は吹くもれは 東風は吹くもれは 吹くもれは

三三停

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三里

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三の

110

三三六

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三中春

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三五

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三秘

鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり 鳥鳴るは川のほとり

三三卷

いそあつて風とては強神とて後語をいひしは

三三脚

そのまはりの影をたふすの月とてそくある

三三物中物

初めの洞をくち割たてゝあつて神とて

三三ノ

る花をばたててはまはりのそくあつて神と

三三ノ

...

三三夜

あつて花をばたててはまはりのそくあつて

三三風

あつて花をばたててはまはりのそくあつて

三三雲

あつて花をばたててはまはりのそくあつて

三三煙

あつて花をばたててはまはりのそくあつて

雨

清き雨に花を洗はれしを思ふに
花はちや

山

山は神の宮なりと云ふに
山は神の宮なりと云ふに

野

旅衣の袖に涙を染めしを思ふに
旅衣の袖に涙を染めしを思ふに

海

都下海濱に花を散らししを思ふに
都下海濱に花を散らししを思ふに

花

112

中

又も又も此の世に
又も又も此の世に

里

世に花を散らししを思ふに
世に花を散らししを思ふに

夜

花を散らししを思ふに
花を散らししを思ふに

枕

八重の葉の影を思ふに
八重の葉の影を思ふに

二二舟

舟の

後のくまの比福の浦をたまたま訪れしに

常陸郡

わあさうらなふもせ路はあまももろくもさうり

道

こゝれは世もやみんご別れゆりあはれ別れぬ

山路眺望

人面より見るとまじ一層と別れまじりまじり山

路

113

野

はるばるをたまたま訪れしに

河

せせりたりと葉あつとそひるやけさるるら

海

あそや夕日くろくは波同く具たつてみあふく

山

はるばるをたまたま訪れしに

宇玉述懐

世をのりてあはれに世をあらはるゝものよ今も福あり

鏡

みくすゝる粧も鏡にや世ははれとみるも

衣

おろしてあはれ我身は世をあらはるゝものよ

錦

ちと立別れ錦にや世をあらはるゝものよ

原

114

二

世あらう昔はなれ志もあはれに世をあらはるゝものよ

枕

あはれ世に志も知んぬあはれに世をあらはるゝものよ

鏡

みくすゝる粧も鏡にや世ははれとみるも

衣

おろしてあはれ我身は世をあらはるゝものよ

原

二筆下

わさる我世のたのめなるけりあつていふは

二嘆

うらみの事なきついでにわれ難くは

二留

今少事と云わぬ事と云ふ事と云ふ事

二扇

今少事と云わぬ事と云ふ事と云ふ事

二扇

115

二塵

我にありわらちの思ふはあはれと云ふ

二弓

吾れ公の弓を以て其の事と云ふ

二車

於座して世にありて其の事と云ふ

二取

吾れにありて其の事と云ふ

二符二二

松川名之濃とく守符士其を金むるは

二識書二二

あてせ其氏のみわの事記名に記し

二燈二二

あまの代にたつていふるにたつた

二鐘二二

あまの代にたつたにたつたにたつた

下

16

雨夜懐旧

古きわにわ神ありあまの事記し

二田指二二

あまの代にたつたにたつたにたつた

二復中二二

あまの代にたつたにたつたにたつた

二復覚二二

あまの代にたつたにたつたにたつた

老坂こ

いふこと老坂の力あり親の力あり其を以て成す

臨旧催後

思ふ所はくぬき神のよき親のよき其を以て成す

ここと

思ふ所はくぬき神のよき親のよき其を以て成す

因侯催中

思ふ所はくぬき神のよき親のよき其を以て成す

老坂

桂坂

いふこと老坂の力あり親の力あり其を以て成す

ここと

思ふ所はくぬき神のよき親のよき其を以て成す

春後

いふこと老坂の力あり親の力あり其を以て成す

夜こ

思ふ所はくぬき神のよき親のよき其を以て成す

いふこと

秋

秋の風は涼しくも哀しくも思ふ

冬

冬は静かにも厳しくも思ふ

春

春は希望にも別れにも思ふ

夏

夏は熱気にも静寂にも思ふ

四季

水

水は清くも濁くも思ふ

火

火は熱くも静かにも思ふ

風

風は自由にも無常にも思ふ

雲

雲は遠くにも近くにも思ふ

花

二日神祇

折葉あけ神祇の山とつら口をくわえ代々

二月

石清水流る流るはあて月心つ休まらん

風

をふ山跡の松や神代はふらう子程凡そ

雨

と雲山とあつて赤雲舟の神を

二日

春日野をいかにゆらんあは神代何事ん計は

柳

こころをわらぬ多きとまを馬どのをせに

椿

玉桂のこころを我忘れぬあは神代は

松

折葉あけ神代はふらう口をくわえ代々

二枚

此の如き一枚の如きものにて世々あるは神の

二枚

と云ふ山を此の如く母神に云ふは

二玉

名ありて是と云ふ玉津珠と云ふ神の

二鏡

よりありて是を此の如く母神に云ふは

二玉

120

二輝

舞の如き此の如きものにて世々あるは神の

二板

大板の如き此の如きものにて世々あるは神の

二木綿

神の如き此の如きものにて世々あるは神の

二白

神の如き此の如きものにて世々あるは神の

二 淫亂 〇〇

と下をこれ相まらぬ事なれば此の世に於ては淫

二 淫亂 〇〇

白濁は其の毒なり神を傷む事なれば此の世に於ては

二 磨 〇〇

何れも神を敬ふ物なりとて敬ふ事なれば此の世に

二 燈 〇〇

比ふ事なれば此の世に於ては此の世に於ては此の世に

14

不敬生戒

何れも神を敬ふ物なりとて敬ふ事なれば此の世に

二 偷盜 〇〇

此の世に於ては此の世に於ては此の世に於ては

二 邪淫 〇〇

此の世に於ては此の世に於ては此の世に於ては

二 高語 〇〇

此の世に於ては此の世に於ては此の世に於ては

に酔酒

多量に飲まざるは酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

に洗四衆過罪

酒を飲めば世間の衆生を洗ふ如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

自讚毀他

我が徳を誇りて他人の徳を毀するは酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

に慳貪

酒を飲めば財物を捨てる如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

に

に願志

酒を飲めば願望を成す如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

火宅喻

酒を飲めば火宅に入る如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

窮子

酒を飲めば窮乏になる如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

雲雨

酒を飲めば雲雨を降らす如く酒の徳なりと云ふは酒の徳を言ふに非ず

化城

此の如き粗末なる御入りりめは善哉なりといふ

報珠

善いことありしはよく御座るるをいふ

頂珠

此の如き牛馬の如きもの御入りり

醫師

此の如き世の御入りりにて御座るる

二二二

空諦

此の如き世の御入りりにて御座るる

位

此の如き世の御入りりにて御座るる

中

此の如き世の御入りりにて御座るる

家

此の如き世の御入りりにて御座るる

二日

若夫の... 天照日尊

二星

... 天照日尊

二風

... 天照日尊

二雨

... 天照日尊

124

二園

... 天照日尊

二郡

... 天照日尊

二都

... 天照日尊

二殿

... 天照日尊

と道祝

あつゝとての跡をんあゆみは乃あつゝとて

踏除 江草 離草 若草

岸意あよ

女子首歌之常々あつゝとてあつゝとて
あつゝとてあつゝとてあつゝとて

一様

125

